地域連携特例校・協力校等　取組事例集
【平成 30 年度版】

【目次】

○地域連携特例校における取組について …… 1
○本取組事例集について …… 2
○各学校の取組 …… 3～38

・蘭越／倶知安 （３）
・虻田／伊達 （５～８）
・穂別／苫小牧西 (11～13)
・福島商業／函館商業 (15)
・長万部／八雲 (17)
・下川商業／士別翔雲 (20)
・苫前商業／留萌 (22～23)
・常呂／北見北斗 (25)
・佐呂間／北見柏陽 (29～30)
・興部／紋別 (34)
・阿寒／釧路湖陵 (36～38)
・寿都／岩内 （４）
・厚真／苫小牧東 （９～10）
・平取／静内 (14)
・南茅部／函館中部 (16)
・上ノ国／江差 (18～19)
・美深／名寄 (21)
・豊富／稚内 (24)
・津別／美幌 (26～28)
・清里／網走南ケ丘 (31～33)
・雄武／紋別 (35)

北海道教育庁学校教育局高校教育課

（平成 31 年３月）

地域連携特例校における取組について

北海道教育委員会では、地域の教育機能の維持向上の観点や高校が果たしている役割等を踏まえ、第１学年１学級の高校のうち、地理的状況等から再編が困難であり、かつ地元からの進学率が高い高校を「地域連携特例校」に位置付け、地域連携協力校等との連携した教育活動などにより、教育環境の充実を図っています。

地域連携特例校は、平成20年度から導入した「地域キャンパス校」を前身としており、平成30年度においては、道立高等学校21校を地域連携特例校として指定しています。

平成30年３月に策定した「これからの高校づくりに関する指針」では、地域連携特例校が取り組むものとして、次の３つを記載しています。

地域連携協力校との連携

特例校と協力校は、協力校からの出張授業や遠隔授業など、授業に関する連携のほか、合同の学校行事や部活動、生徒会交流などの授業以外の教育活動や教職員の研修などにも連携して取り組みます。

なお、具体的な連携の在り方については、両校による連携委員会で協議します。

地域連携協力校以外の高校との連携

特例校間で、遠隔授業を実施するほか、遠隔システムを活用した生徒会交流や教職員の合同研修などに取り組むことを検討します。

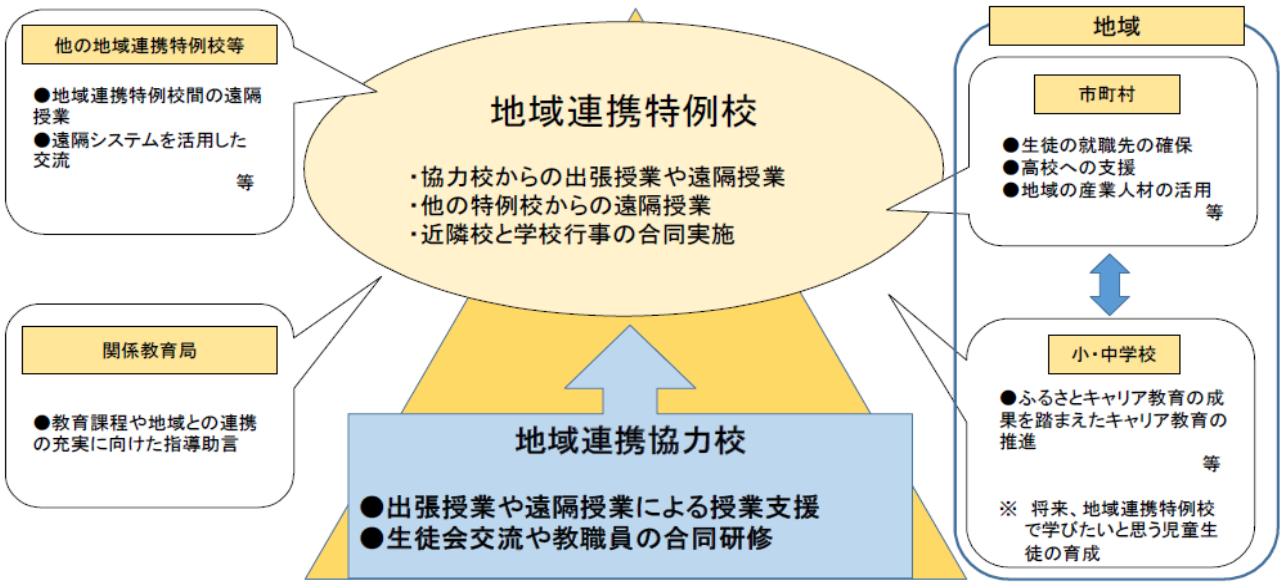
なお、協力校以外の高校との間においても、様々な連携した教育活動を推進するとともに、都市部の規模の大きな高校から遠隔システムによる進路希望に応じた授業等の実施について検討します。

地域と連携した取組

特例校では、学校と地域の連携・協働をより一層推進するため、市町村、小・中学校、地元企業、協力校、教育局などで構成する組織等の設置や、コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）の活用を検討します。

また、こうした組織の支援等のもと、地域の様々な教育資源を積極的に活用して、生徒の社会に参画する意欲を育んだり、地域の担い手としての自覚を高めたりするような教育活動を推進するなど、学校と地域が連携した高校の魅力化や特色づくりなどを進めます。

≪これからの地域連携特例校の姿≫



本取組事例集について

本取組事例集は、地域連携特例校及び地域連携協力校の協力のもと、地域連携特例校の教育環境の充実を図ることを目的に作成したものです。

地域連携特例校及び地域連携協力校においては、本取組事例集を参考に、両校間及び地域とのさらなる連携が充実することを期待しています。

本取組事例集の連携等の種類

地域連携特例校は、前ページに記載した３つの連携等に取り組んでいますが、本取組事例集では、次の①～⑤に分類して、取組を掲載しています。

①地域連携協力校との連携（協力校からの出張授業や遠隔授業など、授業に関する連携）
②地域連携協力校との連携（合同の学校行事や部活動、生徒会交流など、授業以外の教育活動や教職員研修等）
③地域連携協力校以外の高校との連携（遠隔授業）
④地域連携協力校以外の高校との連携（遠隔システムを活用した生徒会交流や教職員合同研修）
⑤地域と連携した取組　・学校運営協議会制度（コミュニティ・スクール）
・市町村や小中学校と連携した教育活動
・地域の教育資源を活用した教育活動

本取組事例集では、各校が取り組む①～⑤の中から特徴的な取組を報告していただき、掲載しています。各校の掲載内容の分類については、下記一覧表を御覧ください。

【本取組事例集の掲載一覧表】

No.	管内	学校名		特例校における学校や関係機関等との連携					該当ページ
		特例校	協力校	協力校		協力校以外の高校		地域	
				①	②	③	④	⑤	
1	後志	蘭越	倶知安				○	○	3
2		寿都	岩内	○	○				4
3	胆振	虻田	伊達	○	○		○	○	5～8
4		厚真	苫小牧東	○	○		○	○	9～10
5		穂別	苫小牧西		○	○	○	○	11～13
6	日高	平取	静内		○				14
7	渡島	福島商業	函館商業	○		○			15
8		南茅部	函館中部	○					16
9		長万部	八雲	○					17
10	檜山	上ノ国	江差	○	○	○			18～19
11	上川	下川商業	士別翔雲		○				20
12		美深	名寄		○				21
13	留萌	苫前商業	留萌	○		○		○	22～23
14	宗谷	豊富	稚内	○	○				24
15	オホーツク	常呂	北見北斗		○			○	25
16		津別	美幌	○		○		○	26～28
17		佐呂間	北見柏陽		○	○	○	○	29～30
18		清里	網走南ケ丘	○	○			○	31～33
19		興部	紋別	○		○			34
20		雄武	紋別	○	○				35
21	釧路	阿寒	釧路湖陵	○	○	○		○	36～38

特例校	北海道蘭越高等学校	協力校	北海道倶知安高等学校

1　遠隔システムを活用した教職員合同研修の取組　【取組④】

【取組の概要】

(1) 常呂高校との教職員合同研修の取組

ア　ねらい

遠隔システムを活用して他校との合同研修を行うことにより、講師依頼に係る経費等を低減するとともに、取組や成果などについて意見交流等を行い、研鑽を深める。

イ　実施時期

平成 30 年 11 月 20 日（火）

ウ　取組概要

北海道常呂高等学校を会場に、北海道北見北斗高等学校で通級の指導を担当している教員を講師とした研修会が開催され、遠隔システムを活用して本校教職員も参加した。

エ　成果等

まだ数少ない通級の指導を担当している教員から、通級の指導の現状や在り方などについての説明を聞き、理解を深めることができた。また、他校と合同で研修することにより、他校の取組の状況等を把握することができ、今後の本校の取組の充実を図ることができた。

2　小学校との交流授業の取組　【取組⑤】

【取組の概要】

(1) 水質調査交流授業の取組

ア　ねらい

本校生徒が町内の小学生に対し、身近な河川の水質調査の必要性や方法などを説明することにより、学習内容の理解の深化を図る。また、異年齢集団との触れ合いを通じて、表現力を高めるとともに、他者を思いやる気持ちを育む。

イ　実施学年・実施時期等

・第２学年
・平成 30 年７月 23 日（月）

ウ　取組概要

少人数のグループに分かれ、本校生徒が小学生に対し、水質調査を実施する理由や方法、留意点などを説明し、協力して水質調査を行った。

エ　成果等

水質調査について、小学生にも分かりやすいように説明することにより、本校生徒の学習内容の理解を深めることができた。また、年齢の異なる他者とコミュニケーションをとることにより、表現力や相手のことを考えて話し合う姿勢を育成することができた。

3　地域連携特例校・協力校の連携に係る成果（○）と課題（●）等

【成果と課題】

○習熟度別授業を実施することにより、生徒の理解度に応じた指導の充実を図ることができた。

○お互いの生徒会役員によるリーダー研修会を実施し、生徒の主体的に取り組む意欲の向上を図ることができた。

●個別指導の時間を設定するために、日程の調整等が困難である。

【今後に向けて】

・生徒の実態に応じた習熟度別のグループ編成を行い、一層効果的な習熟度別授業を実施する。
・生徒会同士の交流を深めつつ、他の連携した取組についても検討する。

特例校	北海道寿都高等学校	協力校	北海道岩内高等学校

1　地域連携特例校・協力校が連携した取組　【取組①】

【取組の概要】

(1) 出張授業・遠隔授業の取組

ア　実施学年・教科・科目等

・第３学年／国語／探究古典、国語表現
・第２学年／国語／古典Ａ
・第１学年／理科／化学基礎

イ　実施時期

通年、計８単位

ウ　実施内容

上記科目を通年にわたり、適宜、遠隔授業を取り入れながら、出張授業を中心に実施した。

エ　実施に当たって工夫した点

遠隔授業を実施する際、特例校と協力校の教員が事前に打合せを行い、受信側の教員に対し、机間指導などの役割を依頼することにより、円滑に授業を実施することができた。

オ　成果等

授業の進度や指導の方法、生徒の理解度などについて情報を交換するなど、両校の教員間の交流を深めることにより、生徒の実態に応じた学習指導の充実を図ることができた。

2　地域連携特例校・協力校が連携した取組　【取組②】

【取組の概要】

(1) 合同芸術鑑賞の取組

ア　ねらい

本格的な舞台芸術に触れることにより、豊かな心と感じる心を育てる。

イ　実施学年・実施時期等

・寿都高校と岩内高校の全学年
・平成30年10月３日（水）（岩内町文化センター）

ウ　取組概要

・３年ごとに合同で芸術鑑賞を行っている。
・遠隔システムを活用し、事前に、両校の生徒会役員が、当日の挨拶や紹介、鑑賞後のお礼、花束贈呈などの役割分担について打合せを行った。

エ　成果等

・費用面の問題から特例校単独では実施が困難である内容についても、協力校と連携することにより実施できた。
・遠隔システムを活用した両校の生徒会役員の打合せを行うことにより、協力する意識やコミュニケーション能力を高めることができた。

3　地域連携特例校・協力校の連携に係る成果（○）と課題（●）等

【成果と課題】

○出張授業・遠隔授業により、多様な選択科目を設定することができ、目指す生徒像の育成に向けた教育課程の充実を図ることができた。
○他校と協力した取組を行うことにより、本校の取組を見直し、改善・充実を図ることができた。
●遠隔システムの使用に係る日程等が固定化されており、柔軟に対応することが難しい。
●出張授業・遠隔授業の担当者が本校に滞在する時間が短く、生徒の質問などに対応できないことがあるため、教員が連携して、サポート体制を構築する必要がある。

【今後に向けて】

・連携校と協力校の教員が情報交換できる機会を積極的に設定し、両校の授業改善の充実を図りたい。

特例校	北海道虻田高等学校	協力校	北海道伊達高等学校

１－(1)　遠隔システムを利用した体育実技の授業実践　Ⅰ・Ⅱ　【取組①】

【取組の概要】

(1) 体育実技の遠隔授業Ⅰ・Ⅱ

ア　実施学年・教科・科目等

・虻田高校　第１学年（通常授業、男女共修）
・伊達高校　第３学年（トレーニング学、選択）

イ　実施時期

・Ⅰ：平成 30 年６月19日（火）
・Ⅱ：平成 30 年７月３日（火）

ウ　実施内容

【トレーニング実践とボディケア】

協力校(伊達高校)の第３学年選択〈トレーニング学〉において、専門学校の協力のもと、トレーニング実践やストレッチ等のボディケア、また鍼灸や技師装具関係を学び、障がい者スポーツ等について学ぶ機会を設けている。

エ　実施に当たって工夫した点

手本を示す講師や生徒の動きを特例校にわかりやすく伝えるため、システムを有効に使う手立てを工夫した。また、特例校において、画面を見ながら生徒を指導するため、特例校での授業者が実施内容について事前に理解を深めておく必要がある。

オ　成果等

協力校では３年選択の授業であったため、特例校の第１学年にとっては内容が若干難しい部分があったが、生徒は積極的な姿勢で臨んだため、生き生きとした活気のある遠隔授業の実践ができた。

１－(2)　遠隔システムを利用した体育実技の授業実践　Ⅲ　【取組①】

【取組の概要】

(2) 体育実技の遠隔授業　Ⅲ

ア　実施学年・教科・科目等

・虻田高校　第１学年(通常授業、男女共修)
・伊達高校　第１学年(通常授業、男子)

イ　実施時期

平成 30 年 11 月 20 日(火)

ウ　実施内容

バスケットボール

エ　実施に当たって工夫した点

協力校の担当者が特例校へ行き、特例校の担当教諭のサポートをしながら遠隔授業を実施したため、スムーズに授業ができた。これから遠隔授業を実施する場合、指導案等のデータを基に、綿密な打合せを行うことで、特例校へ移動することなく実施することが可能になると考えられる。しかし、実施分野や専門性を考慮した場合、協力校の担当者が特例校へ移動し、直接指導した方が良い場合もあると考えられる。

オ　成果等

特例校の生徒が遠隔システムに慣れてきており、これまで以上に積極的に取り組む姿勢が微笑ましかった。大型スクリーンへの投影が可能になれば、より活発な実践となり、さらには生徒同士の交流という要素も格段に広がる可能性を感じた。

２－(1)　進路学習「なるには説明会」の連携　【取組②】

【取組の概要】

(1) 進路学習「なるには説明会」の連携

ア　ねらい

伊達高校及び虻田高校両校の生徒の職業観の醸成を目指し、進路学習「なるには説明会」を共有することで、将来の進路目標実現のためのプロセスを学ぶ。

イ　実施学年・実施時期等

・虻田高校(第１、２学年)、伊達高校(第２学年)
・平成 30 年 12 月 13 日(木) ５、６校時

ウ　取組概要

特例校（虻田高校）の第１、２学年の生徒が協力校（伊達高校）に来校し、自分が興味を持っている職種について、専門の講師から話を聞いた。ローテーションを行い複数の分野について理解を深め、将来の進路目標実現のためのプロセスを学んだ。

エ　成果等

７年前に伊達高校で実施した交通安全の実地研修を実施して以来の初の合同学習となる。互いに緊張した面持ちで始まった学習活動であったが、次第に表情も明るくなり、自己の進路意識の向上に大きく影響を与えることのできた有意義な連携であった。また、生徒たちが講師の話に真剣に耳を傾けながらメモをとる姿は素晴らしかった。

生徒数が減少し、講師の確保もままならない特例校の現状について理解し、協力校として可能な限りの配慮と積極的な連携活動の提案をしていくことが、この地域の将来を担う人材の育成につながると信じ、これからも推進していくことが重要である。

２－(2)　遠隔システムを利用した共同職員研修　【取組②】

【取組の概要】

(2) 遠隔システムを利用した〈e-ポートフォリオ〉についての共同職員研修

ア　ねらい

高大接続による入試制度改革について理解を深めるとともに、ｅ-ポートフォリオの活用方法及び遠隔システムを利用した職員間の連携を図った。

イ　実施学年・実施時期等

・伊達高校、虻田高校の教職員
・平成 30 年 12 月 14 日（金）14:30～16:00

ウ　取組概要

今年度入学生から適用される「入試制度改革」であるが、その詳細については、まだ明確なものが示されていない状況であることを受け、このことについての研修を両校の進路指導部で連携し、共同で実施した。

エ　成果等

高大接続に係る入試制度改革は、早くから囁かれてはいたものの、その詳細についてはなかなか知ることができなかった。いよいよ平成 32 年度からスタートすることを踏まえ、少々遅い感もあるが、本腰を入れて取り組んでいかなければならない。使用については、既に始めてはいたが、その様式や生徒に取り組ませる場合の方法等について研修を深めることができた。

3　地域連携特例校間の取組　【取組④】

【取組の概要】

(1) 生徒会交流

ア　ねらい

各校の生徒会執行部から、各学校の特色や生徒会行事及び学校の課題や解決に向けて、その方向性に係る情報交換及び意見交換を行った。生徒会活動及び生徒会行事の意義や目的の明確化を図り、各学校における生徒会活動の充実を図った。

イ　実施学年・実施時期等

※遠隔システムを使用

・厚真高校生徒会、穂別高校生徒会、虻田高校生徒会

・平成 30 年 12 月 19 日（水）15：45～16：45

ウ　取組概要

①各校自己紹介

②各校取組及び現状等報告

③各学校への質疑応答

④次回交流会までに行われる生徒会活動及び課題の確認

エ　成果等

地域連携特例校間の交流において、それぞれの生徒会活動をパワーポイント等で説明し、活発な質問や意見が出るなど、コミュニケーションを図ることができた。また、各校の概要や生徒会の取組を知る良い機会となった。

4　地元中学生を対象とした遊覧船ガイド　【取組⑤】

【取組の概要】

(1) 遊覧船ガイド

ア　ねらい

「地域ふるさと学習」の一貫として地域の教育資源を活用して虻田高校の生徒が学んだことを、地元の中学生に教えることにより、地元洞爺湖町への理解の深化を図るとともに、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力を養う。

イ　実施学年・実施時期等

・虻田中学校第３学年 37 名　虻田高校第３学年 17 名

・平成 30 年８月 23 日（木）10 時～12 時

・洞爺湖

ウ　取組概要

５班に分かれて洞爺湖遊覧船に乗船し、遊覧船から見える景色や洞爺湖に関して、虻田高校の生徒がガイドをし、洞爺湖周辺の自然環境や中島の紹介、難読地名や北海道弁のクイズ、虻田高校に関するクイズなど、工夫を凝らしてガイドを行った。

エ　成果等

高校生は、中学生に説明やクイズを出題したり、地元の観光資源について質疑応答したりすることにより、主体的に学習に取り組む態度が見られた。高校生、中学生ともに、ふるさとを実際に目で見て肌で感じながら、中身の濃い学習ができた。また、中学生にとっては、虻田高校での学習内容を知ることができた。

5　地域連携特例校・協力校の連携に係る成果（○）と課題（●）等

【成果と課題】

○体育実技は、カメラを広角で使用するとモニターでは見えにくくなる。また、ズームアップさせるとカメラワークが追い付かない。実技指導を充実させるためには、手本を示す教員が、生徒の動きを特例校にわかりやすく伝えるための操作テクニックを習得することも必要である。また、ステージ上に設置した大型スクリーンへの投影を可能にすることと、音声を体育館の生徒全体に聞きやすくするため、放送機器に接続することができれば、よりアクティブな授業が可能になると考える。

○特例校の生徒にも遠隔システムへの慣れがみられ、初回の取組よりも積極的に取り組む姿勢が見られた。生徒の成長を感じる瞬間でもあった。

○体育実技においても、遠隔システムを利用した授業実践ができることを確認できた。

○通常実施している出張授業はもちろん、様々な連携の取組で学ぶことができるのは生徒だけではなく、教員も同様に学べる機会が多いと考える。

○連携についての取組は、両校の分掌や教科等ごとにアイディアを出し合うことが必要である。ボトムアップによる連携の広がりはさらに充実したものになるであろうと感じる。４月当初に、両校の分掌や教科等で連携した取組について、それぞれが主体的に計画を立てることが重要である。

●授業者がモニターを確認しながらの進行になるためか、協力校で授業を受けている生徒の動きを止めてしまう間が多くなる傾向にある。

●生徒の移動には経費がかかるため、早期の立案と両校との協議が欠かせない。

●両校の職員は、互いに研修し協働することでの互恵関係を大切にする意識を持たなければならない。

●体育館では、両校に大型スクリーンへの投影ができれば、より活発な実践が期待できる。

●システムについて、通信のタイムラグが大幅に改善されたが、話し手のスピードによっては相手に伝わりづらいため、ある程度の慣れが必要である。

【今後に向けて】

・遠隔システムを有効活用するため、プロジェクターと接続し、体育館のステージ上に設置した大型スクリーンに投影できるようにした。音声も放送機器と連動させるようにしたい。

・これまで以上に、積極的な連携活動ができるよう、両校の連携を密に図っていきたい。

・遠隔システムを利用した授業以外の生徒間の連携を行うことがなかったため、今後は生徒会の交流についても実施していくことも検討する。手本を示す教員と生徒の動きを特例校にわかりやすく伝えるための操作方法等について操作技術を習得する必要がある。

・今年度最後の連携委員会での反省を受けて、より質の高い連携ができるよう工夫・改善し、早期での計画・立案が必要である。

特例校	北海道厚真高等学校	協力校	北海道苫小牧東高等学校

1　地域連携協力校からの出張授業の取組　【取組①】

【取組の概要】

(1) 実施学年・教科・科目等

・第３学年／国語／現代文Ｂ　　（４単位）
・第３学年／外国語／英語会話　（２単位）
・第２学年／外国語／英語表現Ⅰ（２単位）

(2) 実施時期

通年

(3) 実施に当たって工夫した点

協力校派遣教員の担当授業への配慮

【成果等】

(1) 成果

・少人数授業及び習熟度別授業によるきめ細かな生徒への指導ができた。
・複数教科担任による情報共有・初任段階教員への指導ができた。

(2) 課題

・授業変更等への対応に課題がある。
・遠隔授業の指導技術を養成する必要がある。
・協力校内の人員配置の共通認識を持つ必要がある。
・遠隔機器の使用に関するマニュアルを作成する必要がある。
・両校の学校特色に違いがある。

2　地域連携協力校との生徒会交流・学校行事の取組　【取組②】

【取組の概要】

(1) 生徒会交流の取組

ア　ねらい

両校の生徒会活動の特徴や課題を共有し、今後の活動の充実及び交流の深度を深める。

イ　実施学年・実施時期等

・生徒会執行部
・平成30年６月６日（水）（生徒会交流）
・平成30年７月８日（日）（協力校学校祭）
・平成30年７月14日（土）（特例校学校祭）

ウ　取組概要

特例校の生徒会執行部が協力校を訪問し、両校の生徒会活動の相互紹介を実施した。また、互いの学校祭に参加した。

エ　成果等

両校の取組を相互理解することで、両校の良好な関係を深めることができた。

(2) 地域行事交流の取組

ア　ねらい

特例校のある厚真町の一大行事「あつま田舎まつり」に両校生徒が参加し、地域貢献及び地域理解の機会とする。

イ　実施学年・実施時期等

・厚真高校第１学年、生徒会執行部
・苫小牧東高校生徒会執行部
・平成30年６月16日（土）

ウ　取組概要

「あつま田舎まつり」における、「田舎まつり音頭」パレードに参加した。

エ　成果等

パレードでは協力校生徒の踊りが表彰されるなど、祭りを盛り上げることに大きく貢献し、生徒間の親睦をより深める成果となった。

3　協力校以外の高校との取組　【取組④】

【取組の概要】

(1) 特例校三校間の生徒会交流の取組

ア　ねらい

各校の生徒会執行部から、各学校の特色や生徒会行事及び学校の課題や解決に向けて、その方向性に係る情報交換及び意見交換を行った。生徒会活動及び生徒会行事の意義や目的の明確化を図り、各学校における生徒会活動の充実を図った。

イ　実施学年・実施時期等

※遠隔システムを使用

・穂別高校生徒会、虻田高校生徒会、厚真高校生徒会

・平成30年12月19日（水）15：45～16：45

ウ　取組概要

特例校（虻田、穂別、厚真）間における遠隔システムを活用した生徒会交流

エ　成果等

・同規模校の取組を知る機会となり、参考となる情報が多く得られた。

4　地域と連携した取組　【取組⑤】

【取組の概要】

(1) 胆振総合振興局・自治体と連携した取組

ア　ねらい

地域の基幹産業や職業に対する理解を深め、職業観を養う。

イ　実施学年・実施時期等

・厚真高校　第１、２学年

・平成30年10月31日（水）

ウ　取組概要

企業見学、樹木調査体験、馬搬体験等

エ　成果等

林業・木材産業を中心とした第一次産業及び地域産業への理解が促進された。

5　地域連携特例校・協力校の連携に係る成果（○）と課題（●）等

【成果と課題】

○他校の情報（進路・行事等）を入手することができた。

○教員（教科・研修等）の連携が深まった。

○学校間交流により生徒の視野及び見識が拡大した。

●授業者が遠隔システムの活用について習熟する必要がある。

●遠隔システムの汎用化及び遠隔システムに慣れる必要がある。

●学校間連携の予算を確保する必要がある。

【今後に向けて】

・特例校間の交流を進め、遠隔交流から現地での直接交流等への実践の可能性を探る。

・合同行事、意見交換会、リーダー研修会、相互交流等の内容を進化させる。

特例校	北海道穂別高等学校	協力校	北海道苫小牧西高等学校

1　地域連携協力校との連携による取組　【取組②】

【取組の概要】

(1) 合同芸術鑑賞の取組

ア　ねらい

芸術に触れることで情操を豊かにする。

イ　実施学年・実施時期

・全学年
・平成 30 年９月 27 日（木）

ウ　取組概要

穂別高校と苫小牧西高校の全校生徒が合同で演劇鑑賞を行った。

エ　成果等

・毎年、両校で相談しながら演目を選定し、３年間で違う内容を実施する。
・小規模校では実施が困難であるが、合同にすることで毎年芸術鑑賞を実施し、３年間で様々な分野の芸術に触れることができる。
・震災直後の時期であったため、芸術に触れる機会は特に貴重であった。

(2) ジョイントコンサートの取組

ア　ねらい

音楽を通して地域連携特例校と協力校及び地域との交流を深める。

イ　実施学年・実施時期

・苫小牧西高校吹奏楽部　第１～２学年
・穂別高校　全学年
・平成 30 年 12 月 17 日（月）

ウ　取組概要

・苫小牧西高校と穂別高校の吹奏楽部が合同の演奏会を行う。
・地域住民や小中学校・保育園など約 200 人が参加して音楽に触れる。

エ　成果等

・今年度で４回目を迎え、地域の方々にも親しまれる行事となっている。
・地域連携特例校・協力校間と地域の方々との交流を深めることができた。

(3) 部活動交流の取組

ア　ねらい

合同練習を通してお互いを刺激し合い技術を高める。

イ　実施学年・実施時期

・苫小牧西高校及び穂別高校　吹奏楽部　第１～２学年
・苫小牧西高校及び穂別高校　弓道部　　第１～２学年
・平成 30 年 12 月 16 日（日）

ウ　取組概要

各部で合同練習を行った。

エ　成果等

合同練習によって普段はできない大人数での練習に取り組むことができ、意欲が高まり、技術の向上につながった。

(4) 生徒会交流の取組

ア　ねらい

お互いの活動を紹介し合い、より充実した活動を行う。

イ　実施学年・実施時期

・苫小牧西高校生徒会執行部　第１～２学年
・穂別高校生徒会執行部　第１～２学年
・平成 30 年９月 27 日（木）

ウ　取組概要

自己紹介や学校紹介、生徒会活動の紹介を行い交流した。

エ　成果等

自校の課題を確認し、改善の方策を考える糸口となった。

2　地域連携特例校間の遠隔システムを活用した取組　【取組③】

【取組の概要】

(1) 阿寒高校との交流授業の取組

ア　実施学年・教科・科目等

・第１学年／総合的な学習の時間（４時間）
・第２学年／総合的な学習の時間（４時間）

イ　実施時期

・平成 30 年 11 月～平成 31 年１月

ウ　実施内容

・８月31日（金）両校職員打合せ
①11月21日（水）阿寒高校　第１学年配信（阿寒幼稚園との交流）
②12月７日（金）穂別高校　第１学年配信（町内バス見学会・小中高連携ＰＪ）
③12月18日（火）阿寒高校　第２学年配信（台湾への見学旅行）
④１月25日（金）穂別高校　第２学年配信（広島・京都・東京への見学旅行）

エ　実施に当たって工夫した点

・地域や学校の特色をわかりやすく伝える。
・自己紹介や意見交換など、交流する機会を作る。

オ　成果等

・交流授業を通して、自分達の住む町や学校、活動についての理解がさらに深まり、阿寒高校との違いを知ることができた。
・交流や意見交換を通して視野を広げることができた。

3　地域連携特例校間の遠隔システムを活用した取組　【取組④】

【取組の概要】

(1) 生徒会交流の取組

ア　ねらい

・各校生徒会執行部の交流を深める。
・互いの活動を紹介しながら、自校の課題について認識し、改善の方策を探る。

イ　実施学年・実施時期

・穂別高校、厚真高校、虻田高校の生徒会執行部　第１～２学年
・平成 30 年 12 月 19 日（水）15:45～16:45

ウ　取組概要

穂別・厚真・虻田の３校を遠隔システムでつなぎ、各校の生徒会の活動を紹介する。

エ　成果等

互いの共通点・相違点を知ることにより、自校の課題を認識し、今後の生徒会活動を充実させるための一助となった。

4　地域と連携した取組　【取組⑤】

【取組の概要】

(1) マザーズフォレスト（植樹祭）・お話の集いへの参加

ア　ねらい

・地域の基幹産業である林業について知り、植樹体験を通して理解を深める。
・様々なキャリアを持つ方の話を聞き、自分のキャリアプランの参考にする。

イ　実施学年・実施時期

・全学年
・平成 30 年５月 19 日（土）

ウ　取組概要

・林業の現状について学習した後、実際に植樹を行う。
・パネリストの有森裕子さん、崔洋一さんなどの職業選択や困難に打ち勝つ方法などを聞き、自分の進路選択について考える。

エ　成果等

・町民の方々と交流しながら、植樹の大切さを体感することができた。
・自分のキャリアプランの参考にすることができた。

(2) 学校祭と流送まつりの合同開催

ア　ねらい

・本校の学校祭を多くの町民に見て理解を深めてもらう。
・町民と協力しながら地域のまつりに参加し、地域の伝統行事を盛り上げる。

イ　実施学年・実施時期

・全学年
・平成 30 年７月 22 日（日）

ウ　取組概要

・地域の伝統行事「流送まつり」の「流送競技」や「丸太切り競争」などに参加する。
・祭りの会場で模擬店販売を行う。
・祭りのステージで仮装パフォーマンスを披露する。

エ　成果等

・地域の方が学校の教育活動を見る機会となり、学校への理解につながった。
・多くの方に活動を見てもらうことで生徒は達成感を味わうことができた。
・準備を手伝い、競技に参加するなどして祭りを盛り上げることで、地域への愛着が深まり、地域の一員であることの自覚が芽生えた。

5　地域連携特例校・協力校の連携に係る成果（○）と課題（●）等

【成果と課題】

○地域連携特例校・協力校間の様々な連携事業を通して、小規模の学校では体験できないことを体験することができ、生徒の活動の幅を広げることができた。
○地域連携特例校間の遠隔システムを活用した交流を積極的に行うことにより、様々な地域の特色やそれを生かした活動を知ることができ、自校の課題や改善の方策を考える機会となった。
○地域との連携した取組を行うことで、地域の方の教育活動に対する関心を高め理解を深める機会となった。
○地域との連携した取組によって、地域への理解を深めるとともに、地域に貢献することの意義や喜びを体感することができた。
●授業時数確保や他の学校行事などとの兼ね合いにより、時間を確保することが難しい。
●準備において授業の中で時間を確保できないため、指導する教員の負担が大きい。

【今後に向けて】

・今年度実施した取組は大きな意義があるものと捉えているため継続して実施する。
・取組の内容については準備の負担の軽減や時間の短縮など内容を精査しながら行う。

特例校	北海道平取高等学校	協力校	北海道静内高等学校

1　合同学校行事の取組　【取組②】

【取組の概要】

(1) 合同芸術鑑賞の取組

ア　ねらい

協力校と合同実施することで、招聘団体の選択を広げ、質の高い芸術鑑賞を行う。

イ　実施学年・実施時期等

・全学年
・平成 30 年 11 月 19 日（月）

ウ　取組概要

琉球伝統歌舞集団『琉神』を招き、静内高校を会場に合同で芸術鑑賞を実施。平取高校生 59 名、静内高校生 489 名と合同で鑑賞とした。

エ　成果等

演じられる踊りや歌等を、多くの生徒と共に鑑賞することで、会場の盛り上がりなどを、共有することができた。

(2) 生徒会執行部の学校祭振り返りの取組

ア　ねらい

行事の振り返りを他校の生徒会執行部と共に行うことで、様々な視点やアイディアを共有し、次年度の行事運営に向けた参考とする。

イ　実施学年・実施時期等

・平取高校第３学年第２学年８名、静内高校３年次２年次６名　（生徒会執行部）
・平成 30 年８月 27 日（月）（遠隔システムを活用）

ウ　取組概要

・学校祭での反省点や、内容についての交流
・いじめ防止に向けた取組の情報交換
・その他の質疑

エ　成果等

普段とは違う視点や考え方で行事の振り返りを行うことができた。

2　地域連携特例校・協力校の連携に係る成果（○）と課題（●）等

【成果と課題】

○多くの生徒で鑑賞することによって、演目に対する盛り上がりを共有できた。（芸術鑑賞）
○他校の生徒会の動きを知ることでお互いの考え方が深まった。（生徒会執行部交流）
●平取高校から静内高校への移動時間、時間割の調整などの課題がある。（芸術鑑賞）
●遠隔システムにおける応答のタイムラグに対する対応を検討する必要がある。（生徒会執行部交流）

【今後に向けて】

・芸術鑑賞の在り方について、平取高校では地元との連携を検討している。
・事前の資料交流の工夫など、遠隔装置の不便を補完する工夫を考える。

特例校	北海道福島商業高等学校	協力校	北海道函館商業高等学校

1　遠隔システムを活用した主体的な学びとなる授業の取組　【取組①及び③】

【取組の概要】

(1) ＡＬＴによるインタビューテストの取組（協力校との連携）

ア　実施学年・教科・科目等

・第１学年／外国語／コミュニケーション英語Ⅰ
・第２学年／外国語／コミュニケーション英語Ⅱ

イ　実施時期

平成 30 年 12 月 18 日（火）

ウ　実施内容

函館商業高校ＡＬＴとスクリーンを通して、日常生活に関する質問に答えるインタビュー形式で実施。

エ　実施に当たって工夫した点

事前に質問内容を提示して考えさせ、相手に内容が伝わることやオリジナリティーのある回答となるよう心がけるよう指導した。

オ　成果等

生徒は、英会話を通して身振り手振りを交えながら、ＡＬＴの質問に答えようとする姿勢が見られた。

(2) 調査研究内容発表の取組（特例校との連携）

ア　実施学年・教科・科目等

第３学年／商業／課題研究

イ　実施時期

平成 30 年 12 月 12 日（水）

ウ　実施内容

苫前商業高校と互いに調査研究した内容について発表し、地域の状況や工夫した点など意見交換を行った。

エ　実施に当たって工夫した点

ダブルスクリーンで発表内容と発表している生徒を映して、実際の発表と同じ緊張感もたせるようにした。

オ　成果等

初めての試みであったが、両校とも地域に向けての学習成果発表会を行っているので、互いの発表を聞いて今後の指導の参考にすることができた。

2　地域連携特例校・協力校の連携に係る成果（○）と課題（●）等

【成果と課題】

○通常来校しているＡＬＴとは違い初対面ではあったが、そのことが逆に誰とでもどこでも英語でコミュニケーションを図るというねらいを達成できた。

●初対面ということもあり、授業に向けて事前に打合せを行ったが、本校の普段の授業や生徒の様子等を見てもらった方がよいと感じた。

【今後に向けて】

・連携事業を通して、協力校の強みである授業内容や行き来できる距離の部分と、他の連携校との取組を通して同じ問題や工夫等を知り改善していくという部分を整理しながら生徒の教育活動の充実に努めていく。

特例校	北海道南茅部高等学校	協力校	北海道函館中部高等学校

1　授業に関する連携の取組　【取組①】

【取組の概要】

(1) 出張授業の取組

ア　実施学年・教科・科目等

・第１学年／芸術／音楽Ⅰ　　・第２学年／外国語／英語表現
・第３学年／外国語／英語会話　・第３学年／外国語／実用英語

イ　実施時期

全科目通年実施

ウ　実施内容

協力校の授業者が、特例校に出張して、該当の授業を実施

エ　実施に当たって工夫した点

年度当初に、評価方法等に関する打合せを綿密に行い、授業者が本校の実態に合った授業を実施できるよう工夫した。

また、特例校・協力校の時間割の調整を図りつつ、授業時数の確保に努めた。

オ　成果等

特例校にとって、配置していない教科科目の教員の不足を補うことができた。また、特例校・協力校の教諭が協力することにより、授業の質を高めることができた。

(2) 遠隔授業の取組

ア　実施学年・教科・科目等

第２学年／外国語／英語表現Ⅰ

イ　実施時期

平成 31 年２月

ウ　実施内容

・インタラクションを重視した前時の復習
・パワーポイントを活用した「仮定法」の学習

エ　実施に当たって工夫した点

（配信側）

・生徒各自が学習事項を用いて自己表現できるよう、内容をアレンジした。
・生徒の視線が机上の作業に終始してしまわないよう、教師画面とパワーポイント画面の内容とタイミングを工夫し、画像をイメージングの補助として活用した。
・インタラクションではシステムのタイムラグを考慮し発話した。

（受信側）

・資料やデータを事前に受け取り、万が一配信が止まった際にも対応できるよう準備した。

オ　成果等

・遠距離出張に関わる旅費、授業者の負担を、遠隔授業を活用することで軽減することがきた。また、遠隔授業活用時の準備・実践等、流れの確認ができた。

2　地域連携特例校・協力校の連携に係る成果（○）と課題（●）等

【成果と課題】

○特例校・協力校の教諭が協力して授業を組み立てることにより、生徒に興味・感心を持たせる授業を展開することができた。
○遠隔授業を取り入れることにより、出張に伴う授業者の負担を軽減することができた。
●生徒の評価について、特例校の教務内規による評価方法の共通理解を図る必要がある。
●遠隔授業については、配信側のスキルにより実施の困難度が大きく異なる。

【今後に向けて】

・遠隔授業については、事前に試行を行ったり、配信校側で配信経験者と協力するなど工夫したりすることにより、新たな「配信スキルを持った教員」を作っていく必要がある。

特例校	北海道長万部高等学校	協力校	北海道八雲高等学校

1　遠隔システム活用した連携の取組　【取組①】

【取組の概要】

(1) 実技を伴う教科での取組

ア　実施学年・教科・科目等

第１学年／芸術／音楽Ⅰ

イ　実施時期

平成 30 年７月、12 月

ウ　実施内容

ギター、三味線の演奏を行った。

エ　実施に当たって工夫した点

三味線の授業については、専門の講師を協力校に招き、遠隔システムを活用して行った。

オ　成果等

専門の講師を招くことにより、生徒の知的好奇心がくすぐられ楽器演奏に意欲的に取り組むようになった。

(2) 外国語の授業での合同ポスター発表の取組

ア　実施学年・教科・科目等

第２学年／外国語／コミュニケーション英語Ⅱ

イ　実施時期

平成 31 年１月

ウ　実施内容

長万部町・八雲町それぞれの魅力や現状、及び互いの学校紹介についての発表と質疑応答を英語で行った。

エ　実施に当たって工夫した点

各校の英語科教諭同士が遠隔システムを使って複数回の打合せを行い、シミュレーションをして当日の発表に臨んだ。

オ　成果等

他校の生徒同士が交流することにより、多様な価値観に触れ、相互理解を深めることができた。

2　地域連携特例校・協力校の連携に係る成果（○）と課題（●）等

【成果と課題】

○地域連携特例校で教育課程編成の幅が広がった。

○専門的知識を有する教諭が出張授業をすることにより、実験及び実習を取り入れ、常勤の教諭が行うのと同等の充実した授業が展開された。

●兼務教諭の持ち時間数増加と特例校への移動時間がとられ、勤務時間内での教材研究の時間確保を工夫しなければならない。

【今後に向けて】

・兼務教諭の協力校内における持ち時間数や分掌業務等の配慮をすることで、勤務時間内での教材研究の時間確保が可能である。

特例校	北海道上ノ国高等学校	協力校	北海道江差高等学校

1　グローバル人材育成事業の取組　【取組①】

【取組の概要】

(1) 実施学年・教科・科目等

第１学年／外国語／コミュニケーション英語Ⅰ

(2) 実施時期

平成 30 年 10 月 29 日（月） ５・６校時

(3) 実施内容

江差高校の指定事業である「グローバル人材育成事業」におけるグローバル語り部講演会を上ノ国高校に遠隔配信した。生徒は、世界に開かれた心の育成の在り方や留学の意義について理解を深めることができた。

(4) 実施に当たって工夫した点

協力校、特例校の生徒の実態に応じた講演内容になるように調整を図った。

(5) 成果等

生徒がグローバルかつグローカルな視点で、世界に目を向けるきっかけになる講演内容であった。今後は、生徒のグローバルな視点をさらに広めることができるようにするため、生徒への意識付けや内容の工夫について、協力校と特例校が連携して検討する必要がある。

2　ハイレベル学習セミナーに関する取組　【取組②】

【取組の概要】

(1) 実施学年・教科・科目等

第２学年　希望生徒

(2) 実施時期

平成30年12月15日(土)、26 日(水)、27 日(木)

(3) 実施内容

江差高校で実施された平成 30 年度「北海道高等学校学力向上実践事業」における「ハイレベル学習セミナー『地区セミナー』」に上ノ国高校の生徒２名が参加し、大学進学に向けた発展的な内容等を学んだ。

(4) 実施に当たって工夫した点

数学・英語・国語をそれぞれ１日ずつ、また、内容等を調整し、高校１年生と２年生合同で講習を実施した。本セミナーには檜山北高校からの参加者もあり、普段の講習とは違った緊張感の中で実施することができた。

(5) 成果等

他管内の進学校の教員による講義を通して、他校の生徒と一緒に講習を受けることにより、生徒の進学に対する意識の高揚や、現在の自分の弱点等への気付きができただけでなく、生徒の学習意欲をより一層喚起することができた。

3　地域連携特例校間の授業配信や遠距離の生徒間交流に関する取組　【取組③】

【取組の概要】

(1) 実施学年・教科・科目等

①第２学年／地理歴史／日本史Ｂ
②第３学年／公民／倫理

(2) 実施時期

①日本史Ｂ…平成30年８月20日(月)～30 日(木)
②倫理　　…平成30年12月21日（金）

(3) 実施内容

豊富高校から日本史Ｂの授業受信（８時間分）並びに豊富高校へ社会基礎（地理分野）の授業配信（８時間分）を実施した。また、12 月には倫理の授業において「地域社会に求めるもの」及び「持続可能な地域社会づくり」をテーマとして、合同授業型の遠隔配信を実施した。

(4) 実施に当たって工夫した点

合同授業型の遠隔配信においては、豊富高校の担当教諭よりも経験年数の多い本校教諭がイニシアチブを取ることにより円滑に進めることができた。また、２校の学習進度を調整し、授業当日は無理なく実施できるように配慮した。

また、授業において双方の町の特徴などについて、デュアルシステムを用いて生徒自身が写真やＷｅｂページを見せながら紹介できるように工夫した。

(5) 成果等

特に合同授業型の遠隔配信において、生徒は前向きな姿勢で取り組んでいた。一方で、異学年混合で授業を実施する場合、履修内容等に差が生じることがあることから、調整を行う必要がある。また、授業実施時においては、カメラを生徒側に向けているため、授業担当者の立つ場所や向きに工夫が必要となる。(自校の生徒に向かって立つと、相手校の生徒へは背を向けた映像が配信される。)

4　地域連携特例校・協力校の連携に係る成果（○）と課題（●）等

【成果と課題】

○本校以外の教員や外部講師から授業や講義を受けることにより、生徒の主体性の育成や知的好奇心の喚起に繋げることができた。
○特例校と協力校との連携に基づき、上ノ国高校において芸術（美術）の授業を年間通して実施することにより、生徒の美術に係る学習意欲の向上を図ることができた。
●特例校と協力校の遠隔授業の実施については、教科のバランスや教育的効果を踏まえて、授業計画の策定等を行う必要がある。
●特例校間の遠隔授業の実施については、授業進度、シラバスや授業時間帯の違いもあるため、今後も工夫する必要がある。

【今後に向けて】

・特例校と協力校との連携のメリットを運営委員会等において共有することにより、一層効果的な教育活動を推進できるように努める。
・今後も遠隔システムの効果的な活用方法を検討する。

特例校	北海道下川商業高等学校	協力校	北海道士別翔雲高等学校

1　商業科における体験学習の取組　【取組②】

【取組の概要】

(1) 森林体験学習の取組

ア　ねらい

下川町で取り組んでいる森づくりや森林資源の利活用法について理解を深めるとともに、両校の生徒の交流を通じて、コミュニケーション能力の育成を図る。

イ　実施学年・実施時期等

・実施学年：商業科の第１学年
・実施時期：平成 30 年 10 月中旬

ウ　取組概要

下川町の循環型森林経営や森づくりについて学び、森づくりの一環である枝打ち体験や木質原料製造施設の見学、森林資源の活用をテーマとしたグループワークとグループ発表を行う。

エ　成果等

森林資源の利活用法について理解を深めることができた。また、両校の生徒が共同で作業をしたり、交流をしたりすることで、コミュニケーション能力の育成を図ることができた。

(2) 知的財産学習の取組

ア　ねらい

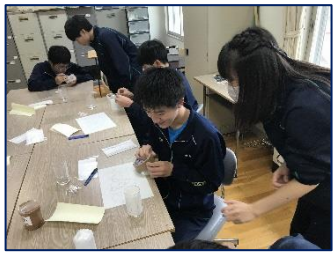
両校の生徒が交流や連携を深めるとともに、体験的な学習を通して、知的財産権についての知識を身に付ける。

イ　実施学年・実施時期等

・実施学年：商業科の第２学年
・実　施　日：平成 30 年 11 月初旬

ウ　取組概要

特例校の教諭による知的財産権についての講義やサンドブラスター実習を行い、商品に関する付加価値や知的財産権の重要性を学ぶ。



エ　成果等

体験的な学習を通して、知的財産権の商品に関する付加価値の重要性について深く理解することができた。

2　地域連携特例校・協力校の連携に係る成果（○）と課題（●）等

【成果と課題】

○商業を学ぶ同じ高校生として、両校の生徒に良い意味でのライバル関係が芽生え、積極的に学習に取り組む姿勢を身に付けさせることができた。
○両校の生徒の交流や共同作業を通じて、コミュニケーション能力の育成を図ることができた。
●体験学習を行う際は、交通費を捻出できないため、移動手段を下川町が提供するバスに頼らざるを得ない状況となっている。
●遠隔システムを利用した事前学習等においては、両校の始業時間の違いによるロスタイムがあることから、授業時間の設定について検討する必要がある。

【今後に向けて】

・体験学習において、両校の特色をさらに生かし、教育内容の充実を図る。

特例校	北海道美深高等学校	協力校	北海道名寄高等学校

1　両校の合同による各種行事の取組　【取組②】

【取組の概要】

(1) 合同での芸術鑑賞の実施

ア　ねらい

様々な分野の優れた芸術を鑑賞することにより、教養を高め、豊かな情操を育成する。

イ　実施学年・実施時期等

協力校及び特例校の全校生徒を対象として、毎年９月下旬に実施している。

ウ　取組概要

演劇や音楽などの芸術団体や個人を毎年１回ローテーションで招へいし、両校が合同で実施している。

エ　成果等

特例校だけでは予算の制約で単独での実施が困難であるが、両校が合同で実施することにより、様々な芸術を名寄市民文化センター「EN-RAY ホール」で鑑賞できるようになり、教育的効果を高めている。

(2) 合同での就職ガイダンスの実施

ア　ねらい

・働くことの意義や多様な職業に関する理解を深め、就職活動への動機付けを図る。
・就職に関する情報交換や意見交換を通じて、社会人として求められる基礎的能力の向上を図る。

イ　実施学年・実施時期等

協力校及び特例校の就職希望の第２学年を対象として、毎年３月に協力校を会場として実施している。

ウ　取組概要

外部講師（専門学校の講師）によるガイダンスを次の内容で実施している。

＜内容＞　１　コミュニケーション体験　　２　仕事や社会の理解
　　３　就職活動の理解　　４　自己ＰＲ・志望動機　　５　模擬面接

エ　成果等

両校が合同で実施するため、参加生徒が緊張感をもって真剣に取り組むなど、有意義なガイダンスとなっている。

(3) 合同での模擬試験の実施（一部）

特例校の大学進学を目指す生徒が、協力校の生徒とともに模擬試験を受けることで、本番に近い雰囲気を経験するなど刺激を受けており、模擬試験を実施した後の学習への取組に効果が現れている。

2　地域連携特例校・協力校の連携に係る成果（○）と課題（●）等

【成果と課題】

○演劇鑑賞について、特例校が単独で実施する場合は、３年に１回の実施となる可能性が高いが、両校が合同することにより、毎年実施できるようになった。
○就職ガイダンスについて、両校の生徒が同じ会場で緊張感をもって取り組むことで、就職に対する意識を高めることができた。
●協力校が中心となって実施するため、両校が早い段階で日程を調整する必要がある。

【今後に向けて】

・遠隔システムを活用した合同の校内研修を実施するなど、両校の連携を一層深める取組を充実させる。

特例校	北海道苫前商業高等学校	協力校	北海道留萌高等学校

1　地域連携協力校から授業の取組　【取組①】

【取組の概要】

(1) 地歴・公民、家庭、音楽の出張授業の取組

ア　実施学年・教科・科目

・第１学年／地理歴史／世界史
・第２学年／公民／政治･経済、家庭／家庭基礎
・第３学年／公民／現代社会
・全学年／総合的な学習の時間（校歌指導）

イ　実施時期

通年（校歌指導は５月と２月）

ウ　実施内容

協力校の教諭による通常授業

エ　実施に当たって工夫した点

冬期の荒天時は遠隔システムによる授業に切り替えることができるよう、事前にシミュレーションを行ったこと（平成 30 年度の活用実績なし）。

【成果等】

(1) 成果

生徒の学習意欲が高まるとともに、初任段階の教員、免許外で担当する教員の指導力を向上させる機会にもなったこと。

(2) 課題

弾力的な時間割の編成が難しいこと。

2　地域連携特例校間の合同授業　【取組③】

【取組の概要】

(1) 札幌市での販売実習会の成果を遠隔地の商業高校と共有する取組

ア　実施学年・教科・科目

・第３学年／商業科／総合実践
・第２学年／商業科／ビジネス情報

イ　実施時期

平成 30 年 12 月 12 日(水)　４時間目

ウ　実施内容

遠隔システムを使い、本校からは販売実習会について、福島商業高校からは商品開発について、課題研究の成果をお互いに発表した。

エ　実施に当たって工夫した点

特に地域と連携した取組を互いに発表したり質問したりするようにしたこと。

【成果等】

(1) 成果

相手校の生徒の取組や、地域との連携の進め方に興味・関心をもち、今後の取組の参考とすることができた。

(2) 課題

最終的な発表を聞くだけでなく、取組中の交流ができないか検討する。

3　地域の小学校と連携した取組　【取組⑤】

【取組の概要】

(1) 地元の小学生との協働による販売実習会の取組

ア　ねらい

苫前町立苫前小学校の児童との協働による販売実習をとおして、ビジネスに関する基礎を学ぶ。

イ　実施学年・実施時期等

・第１学年
・平成 30 年 10 月 26 日(金)

ウ　取組概要

商業科（ビジネス基礎）の演習として、本校で販売実習会を実施した。

エ　成果等

小学生との協働による販売実習をとおして、地域の中での自分の存在について考え、商業スキルの習得への意欲が高まるなど、生徒の自己有用感を高めることができた。

4　地域連携特例校・協力校の連携に係る成果（○）と課題（●）等

【成果と課題】

○他の地域や異年齢との交流をとおして、生徒の興味・関心や自己有用感を高めることができた。

●地域連携協力校から派遣される教職員の移動負担や、両校の時間割上の制約が大きい。

【今後に向けて】

・地域連携特例校･協力校間、特例校同士での生徒会交流や教職員研修の充実を図る。

特例校	北海道豊富高等学校	協力校	北海道稚内高等学校

1　生徒の主体性を伸ばす取組　【取組①及び②】

【取組の概要】

(1) クリスマスコンサートの取組

ア　実施学年・教科・科目等

第１学年／芸術／音楽Ⅰ
（教科担任：協力校教諭）

イ　実施時期

平成 30 年 12 月 25 日（火）

ウ　実施内容

音楽Ⅰでの学習成果の発表の場として、ハンドベルによるミニコンサートを、生徒玄関ホールにて実施した。

エ　実施に当たって工夫した点

生徒が選曲や発表の仕方を主体的に考えられるよう、協力校教諭が支援した。

オ　成果等

授業で得た技能等を発表できたことで、達成感が得られ、学習意欲を向上させることができた。

(2) 生徒会活動の主体性を高める取組

ア　ねらい

生徒が他校の生徒会と、情報交換や議論することにより、生徒の主体性を伸ばし、課題をよりよく解決しようとする力を身に付けさせる。

イ　実施学年・実施時期等

・生徒会執行部（第１・２学年）
・平成 31 年２月２日（土）～３日（日）

ウ　取組概要

稚内市内の体験活動支援施設において、協力校を含め管内の高校の生徒会役員と寝食を共にした。それぞれ、自校の生徒会活動に係る取組や課題について紹介し、課題解決のための在り方について協議した。

エ　成果等

協力校等の生徒会と直接的に交流でき、他校の実践を知ることができた。また、生徒会の行事の改善に向けて、積極的に意見交流ができた。

2　地域連携特例校・協力校の連携に係る成果（○）と課題（●）等

【成果と課題】

○協力校から教諭の派遣を受けることにより、芸術科の科目を複数開設することが可能となり、生徒の学習意欲の向上につながった。
○協力校の教員と連携して授業を実施することにより、授業見学の機会が増加し、教科指導力の向上につながっている。
○協力校と遠隔システムを用いて、英語におけるコミュニケーション活動や音楽の鑑賞などを実施し、システムの活用の幅を広げることができた。
●協力校との遠隔授業について、教育的効果をより高める方法を検討しながら計画を立てる必要がある。

【今後に向けて】

・出張授業と遠隔授業の利点を、特例校・協力校が共有し、さらに効果的な活用を検討する必要がある。
・遠隔システムでの双方向通信の機能を活用し、授業以外の交流を促進し、生徒自らが在り方・生き方を主体的に考えられる機会を設ける必要がある。

特例校	北海道常呂高等学校	協力校	北海道北見北斗高等学校

1　地域連携協力校との連携の取組　【取組②及び⑤】

【取組の概要】

(1) 地域連携協力校と地域連携特例校との連携の取組

ア　連携委員会実施時期

・平成 30 年５月24日（木）第１回連携委員会
・平成 30 年11月14日（水）第２回連携委員会
・その他：教頭間で随時連携

イ　実施内容

今年度及び来年度の連携内容等について
・授業に関する連携　　・授業以外の連携

ウ　実施に当たって工夫した点

来年度に向けて、地域連携特例校の出張依頼科目と地域連携協力校の出張可能科目とが合致しない部分があり、両校で調整をしている。

エ　成果等

地域連携協力校の最大限の協力により、習熟度別授業や選択科目の開設など教育課程の充実を図ることができているが、過去には科目の調整ができず教育局に調整を依頼した年度もあった。

(2) 生徒会交流会の取組

ア　ねらい

地域連携協力校と地域連携特例校の生徒会役員が交流することにより、生徒会の今後の在り方や、学校間の連携した取組等を考える機会とする。

イ　実施時期・実施内容

・平成 30 年12月：遠隔システムを利用した交流
・平成 31 年１月：対面による交流（カーリング交流・アイスブレイク・ワークショップ）

ウ　実施に当たって工夫した点

新生徒会役員が決定後、早い段階で、遠隔システムを活用した交流を実施し、１月の対面交流がスムーズに実施できるよう工夫している。

エ　成果等

少人数で限られた人間関係の特例校の生徒にとって、コミュニケーション能力や人間関係形成能力などの向上のよい機会となっている。

(3) 地域連携特例校間の取組

ア　ねらい

教科担当が校内で１人しかいないことが多い地域連携特例校間で教科、分掌及び部活動等の情報交換を通して、教員の指導力向上を目指すとともに、高校間の交流を深める。

イ　実施時期・実施内容

・平成 30 年 10 月
・授業参観・教科交流・全体交流、終了後交流会

ウ　実施に当たって工夫した点

隔年で実施会場を変更して実施している。

エ　成果等

教科指導の研修及び地域連携特例校の取組を考えるよい機会となっている。

2　地域連携特例校・協力校の連携に係る成果（○）と課題（●）等

【成果と課題】

○協力校の協力のもと、小規模校である本校でも多様な教育課程を編成できている。
●特例校と協力校間で、出張授業科目の調整が難しい。
●生徒間交流やその他の交流まで広げていくと特例校のメリットは増すが、協力校の負担が大きくなる。

【今後に向けて】

・複数の協力校や連携校間が協力できるシステムがあると出張授業科目の調整がしやすくなるのではないか。

特例校	北海道津別高等学校	協力校	北海道美幌高等学校

1　地域連携特例校・協力校における出張授業及び遠隔授業の取組　【取組①】

【取組の概要】

(1) 出張授業及び遠隔授業の取組

ア　実施学年・教科・科目等

第１学年／数学／数学Ⅰ

イ　実施時期

通年

ウ　実施内容

１クラスを２展開し、少人数指導による授業を行った。

エ　実施に当たって工夫した点

出張授業の際に、お互いの年間及び月間行事計画を事前に確認し、振替休業及び学校行事等で支障のないように調整した。

オ　成果等

特に数学が苦手な生徒が多いクラスでは、少人数で一人ひとりの状況を把握しながら個々の能力に応じて授業を進めるとともに、ＩＣＴを活用した授業に取り組み、生徒の理解度が大いに高まった。また、もう一方のクラスでは、発展的な内容を取り扱うことが可能になり、学習意欲の向上につながった。生徒からは「出張授業や遠隔授業で雰囲気が異なるので、気分を換えて授業を受けられる」、「授業がわかりやすい」などの感想が聞かれた。

(2) 出張授業の取組

ア　実施学年・教科・科目等

第２学年／公民／政治・経済

イ　実施時期

通年

ウ　実施内容

選択授業で少人数の授業を行った。

エ　実施に当たって工夫した点

選択科目なので、同時間帯の他の教科の授業との連携を図った。

オ　成果等

少人数での実施により、生徒の授業に対する授業への集中が高まるとともに、内容の深い理解に結びついた。

【地域連携特例校・協力校の連携に係る成果（○）と課題（●）】

○少人数で行われるため、生徒一人ひとりの状況を把握することが可能になり、生徒への声かけができる機会が多くなり、授業に臨む集中力が高まった。

○１教科１人の小規模校なので、本来であれば３年間同じ教員から学ぶことになるが、協力校の先生からの指導を受けられ、学習意欲の向上につながった。

●遠隔授業については、数年前の状況と比較すれば格段に環境は向上したが、音声が聞き取りづらかったり、言葉の行き違いが生じたりすることが依然として生じており、生徒が集中できないことがあった。また、生徒からも「自分の声が届きづらかった」、「質問したいときにできなかった」、「先生の話していることが聞こえにくいことがあった」などの声が聞かれた。

【今後に向けて】

・進学を目指す生徒が多くなったこともあり、１年次に基礎的な能力の定着を図れるように出張授業及び遠隔授業対象の教科を固定し、学習意欲及び学力の向上を目指す。

2　地域連携特例校間における遠隔授業の取組　【取組③】

【取組の概要】

(1) 出張授業及び遠隔授業の取組

ア　実施学年・教科・科目等

第２学年／外国語／英語アドバンスト

イ　実施時期

・平成 30 年６月 26 日（火）
・平成 30 年10月 23 日（火）
・平成 31 年２月 19 日（火）

ウ　実施内容

合計３回、英語を用いて情報交換を行った。１回目は自己紹介、２回目は見学旅行に向けた計画について、パワーポイントを活用してプレゼンテーションを行った。３回目は「My favorite things」をテーマに、写真や実物を使って紹介した。楽器を紹介した生徒は実際に演奏を見せた。

エ　実施に当たって工夫した点

時間割が異なるため、実際に交流する以外の時間を事前学習や事後学習に充てた。

オ　成果等

普段の授業で扱っているスピーキングやリスニングの活動を、実際の場面において使用することにより、生徒の満足度が高まり、学習意欲の向上につながった。また、交流を楽しみながら英語に親しみ、刺激し合うことで学習意欲を高めることができた。

【連携に係る成果（○）と課題（●）】

○１教科１人の小規模校なので、本来であれば３年間同じ教員から学ぶことになるが、他の特例校の先生の英語で学び、生徒との交流も行うなど、学習意欲の向上につながった。
○遠隔システムの活用については、今年度は特例校間での授業交流に活用するなど、活用の幅を広げることができた。
●遠隔授業においては、音声がやや遅く届くため、多くの活動が英語でのやり取りとなるため、行き違いが生じることがあった。

【今後に向けて】

・さらに多くの多様な高校と連携し、様々な活動を行い、交流が図れるようにしたい。

3　地域巡検及び高大連携の取組　【取組⑤】

【取組の概要】

(1) 地域巡検の取組

ア　ねらい

地域の行政や企業活動を知り、社会の仕組に関心を持つ。

イ　実施学年・実施時期等

・第１学年
・７月

ウ　取組概要

津別町役場、山上木工、サンマルコ

エ　成果等

地域のことに関して、初めて知ることがあり、地域への関心が高まった。

(2) 北海道大学との高大連携事業の取組

ア　ねらい

大学生との連携の中で、探究活動を行い、コミュニケーション能力や表現力の向上を図る。

イ　実施学年・実施時期等

・第１、２学年
・８月～12 月

ウ　取組概要

・北大マルシェ
（北大構内での津別用特産品の販売）
・若者議会（津別町への提言）

エ　成果等

大学生と関わることで、自分の意見を主張することの大切さ、コミュニケーションの取り方などを学び、協力して物事を進めることの大切さの他に、進路に関するアドバイスを受け、多くのことを得られた。

【地域との連携した取組に係る成果（○）と課題（●）】

○次年度以降に実施される「つべつ学」に向けて、探究活動の礎ができた。
○学校関係者以外の方々と関わることで、主体性や協調性、傾聴力などを学ぶことができた。
●生徒は学校関係者以外の方々と関わる経験が少ないため、教師の支援が必要な場面が多かった。

【今後に向けて】

・生徒の主体性を養うために、教育活動の場面において、多くの経験を通して自信をつけさせていきたい。

特例校	北海道佐呂間高等学校	協力校	北海道北見柏陽高等学校

1　地域連携特例校協力校間による生徒に係る連携の取組　【取組②】

【取組の概要】

(1) 部活動交流の取組

ア　ねらい

連携校ならではの親密な部活動交流を推進する。

イ　実施学年・実施時期等

・北見柏陽高校器楽局 43 名、佐呂間高校吹奏楽局９名
・平成 30 年５月 27 日（日）実施

ウ　取組概要

吹奏楽の合同練における合奏及び意見交流

エ　成果等

意見交流や発表を通して両校の関係が一層深まった。また、両校が抱える技術的な課題を解決する一助となった。

(2) 遠隔による生徒会交流の取組

ア　ねらい

友好関係の確認と今後の交流内容について協議する。

イ　実施学年・実施時期等

・生徒会執行部（会長・副会長・顧問）
・平成 30 年 10 月３日（水）実施

ウ　取組概要

両校生徒会執行部による遠隔交流及び合同芸術鑑賞に向けた事前打合せ

エ　成果等

両校の関係確認と相互に学校の取組等について理解が深まった。また、意見交流によりコミュニケーション能力の育成を図ることができた。

(3) 合同芸術鑑賞の取組

ア　ねらい

・両校生徒間の友好関係を深める機会とする。
・規模の大きい芸術を鑑賞する貴重な体験とする。

イ　実施学年・実施時期等

・両校全校生徒
・平成 30 年 10 月 11 日（木）実施

ウ　取組概要

両校生徒会長による挨拶、合同での芸術鑑賞

エ　成果等

・両校生徒会長挨拶が部活動実績を互いに讃え合うなど、成果ある内容で実施できた。
・生徒からは「感動を共有できた」「大会結果を喜び合えた」などの感想が多く、自校だけでは得られない体験や交流を図ることができた。

2　地域連携特例校間による遠隔システムを活用した連携の取組　【取組③】

【取組の概要】

(1) 地域連係特例校間による遠隔授業の取組

ア　ねらい

連携により両校教育課程の充実を図り、創意工夫ある授業を展開する。

イ　実施校・実施時期等

・佐呂間高校、津別高校
・平成 30 年６月～平成 31 年３月に 10 時間実施

ウ　取組概要

両校英語科の選択科目（佐呂間「英語表現Ⅰ」12 名、津別「英語アドバンスト」11 名）による合同授業

エ　成果等

交流を楽しみながら英語に親しみ、刺激し合うことで学習意欲を高めることができた。

3　地域連携特例校間による教員に係る連携の取組　【取組④】

【取組の概要】

(1) 通級指導に係る校内研修会合同開催の取組

ア　ねらい

各校職員の通級指導の基本的な考え方について確認し、指導に対する理解を促進する。

イ　実施校・実施時期等

・佐呂間高校 11 名、寿都高校 11 名、栗山高校 22 名

・平成 30 年 11 月 28 日（水）実施

ウ　取組概要

通級指導担当教員活用事業による佐呂間高校校内研修を遠隔システムにて他校に配信

エ　成果等

通級指導についての理解を深め、研修内容を複数の学校で共有することができた。

4　地域と密接に結びついた取組　【取組⑤】

【取組の概要】

(1) 高齢者と高校生による合同授業「寿大学、高校生と学ぶ」の取組

ア　ねらい

異世代との交流を通してコミュニケーション能力の育成と、高齢者の生涯学習促進を図る。

イ　実施校・実施時期等

・寿大学生 110 名、高校生 77 名

・平成 30 年６月 19 日（火）実施

ウ　取組概要

教員と高校生アシスタントによる授業（８科目）から寿大学生が２科目選択する。最後は体育館に集合し、恒例となった「ふるさと」全員合唱でフィナーレを飾る。

エ　成果等

相手の話をしっかり聞ける、理解できるなどのコミュニケーション能力の向上と奉仕の精神を育むことができた。生徒からは「お年寄りから『ありがとう』の感謝の言葉が多く聞けて嬉しかった」などの感想が多く、貴重な体験となった。また、高校生が高齢者の学習意欲に刺激を受け、一層意欲的に学習活動に取り組むことが期待できる。

5　地域連携特例校・協力校の連携に係る成果（○）と課題（●）等

【成果と課題】

○導入から４年経った地域連携特例校・協力校間の連携について、両校生徒・教職員等で定着しており、良好な関係で様々な交流が図られている。

○出張授業は特例校の選択の幅が広がり、教育課程を充実させることができた。また、少人数指導、習熟度別学習が可能となった。

○遠隔システムを用いた連携委員会の開催は、移動時間もかからないことから業務のスリム化につながっている。

○遠隔システムについて、今年度新たに特例校間での授業や、複数校での合同校内研修会において利用するなど、活用の幅を広げることができた。

●遠隔授業当日に機材トラブル（ケーブル破損）が発生したので、機材の配置・ケーブルの予備を準備しておくなど、万が一に備える必要がある。

●特例校間の遠隔授業について、担当教員に頼る場面が多く、組織的な体制での取組が課題となっている。また、遠隔授業の特性を活かした授業展開と指導の創意工夫を図る必要がある。

【今後に向けて】

・連携事業のより円滑で効果的な実施方法を継続的に検討する必要がある。

特例校	北海道清里高等学校	協力校	北海道網走南ケ丘高等学校

1　地域連携特例校・協力校における授業に関する取組　【取組①】

【取組の概要】

(1) 国語科の連携について

ア　実施学年・教科・科目等

第２学年／国語／現代文Ａ（２単位)、古典Ａ（２単位）

イ　実施時期

通年

ウ　実施内容

出張授業を中心とした教科指導

エ　実施に当たって工夫した点

現代文Ａ、古典Ａで習熟度別学習を実施した。また、特例校及び協力校の年間行事予定を事前に確認し、双方の学校行事等に影響の内容に配慮した。

オ　成果等

習熟度別学習を行うことで、きめ細かな指導を行うことができた。教科担当者は、少人数で一人ひとりの学習状況を把握しながら、個々の能力に応じて授業を進めることができた。生徒からは「出張授業は普段の授業と雰囲気が異なるので、気持ちを切り替えて授業を受けることができる」、「出張授業の先生の授業はとても分かりやすい」などの感想が聞かれた。

(2) 数学科の連携について

ア　実施学年・教科・科目等

・第１学年／数学／数学Ａ（２単位）
・第３学年／数学／数学Ｂ（２単位）

イ　実施時期

通年

ウ　実施内容

出張授業を中心とした教科指導

エ　実施に当たって工夫した点

・数学Ａでティームティーチングを実施した。
・数学Ｂで習熟度別学習を実施した。

オ　成果等

ティームティーチング及び習熟度別学習を行うことで、よりきめ細かな指導を行うことができた。習熟度別学習を行うことにより、成績上位層の生徒が多いクラスでは、普段の授業よりも発展的な内容を扱うことができるため、生徒の学習意欲の向上につながっている。

【連携に係る成果（○）と課題（●)】

○出張授業を中心とすることで、協力校の担当者の生徒理解が深まり、手厚い指導につながった。
○協力校の先生からの指導を受けることは、特例校の生徒の学習意欲の向上につながっている。
●出張授業を中心とすることで、協力校の担当者には時間的にも物理的にも負担となっている。

【今後に向けて】

・教育課程が変遷していく中で、現在の成果と同等の成果を今後も上げていけるよう、連携校間での調整が必要である。

2　地域連携特例校・協力校における授業以外での取組　【取組②】

【取組の概要】

(1) 生徒会交流

ア　ねらい

規模の異なる学校での生徒会の運営方法や諸問題について、交流することで自校の運営に役立てる。

イ　実施学年・実施時期等

・生徒会所属生徒
・12 月

ウ　取組概要

例年 12 月に行っている。会場は、清里高校と網走南ケ丘高校を１年交替で行き来している。会場校の生徒会が、受け入れプラグラムを準備しており、アイスブレイクや意見交換等が中心になっている。

エ　成果等

生徒会は、毎年メンバーが替わるので、見識を広げるのに役立っている。

(2) 教職員交流（授業に関する研修）

ア　ねらい

規模の異なる学校の授業内容や生徒理解を深めることで、教員の資質向上を図る。

イ　実施学年・実施時期等

・全学年対象
・10 月～11 月に設定される公開授業週間

ウ　取組概要

１年おきに協力校又は特例校において授業参観を行う。研修内容は、第１回の連携委員会で検討している。実施例としては、特例校の体育科の教員が協力校に出張して、体育の授業に関する研修を受けた。また、協力校の地歴公民科の教員が協力校に出張して授業参観し、合評会を行った。

エ　成果等

・教員の配置にも係わるが、特例校の教員は基本的に教科に１人の体制なので、専門的な意見や授業等の研修を受けることで、資質向上に非常に有益な内容となり、授業改善に役立っている。
・協力校の教員は、規模の異なる学校の授業内容や環境での授業を見ることで、刺激を受け、授業改善に向けた意欲の向上につながっている。

【連携に係る成果（○）と課題（●）】

○どちらの取組もお互いの資質向上に役立っている。
●教員の交流については、２年目なので今後継続して課題を模索したい。

【今後に向けて】

・負担にならないことと、お互いのメリットとなるように交流の方法を模索する。

3　学校運営協議会導入への取組　【取組⑤】

【取組の概要】

(1) 学校運営協議会開催について

ア　ねらい

今年度より導入された学校運営協議会を開催するにあたって、新たな取組を加えるのではなく、これまでの教育活動を深化させる。

イ　実施学年・実施時期等

・第１回　平成 30 年６月 12 日（火）
・第２回　平成 30 年11月 16 日（金）
・第３回　平成 31 年２月 21 日（木）

ウ　取組概要

・第１回は、学校運営方針の確認・承認、学校運営協議会組織図、委員の確認・承認、年間計画の確認承認等が行われた。
・第２回は、本校の現状と課題の報告、学校運営協議会が主導して取り組める内容が協議された。
・第３回目は、取組状況の報告・協議、評価について話し合った。

エ　成果等

１「学校評価アンケート」の内容改善
・応援部局が地域向けの内容を改善した。
２　地域の人的資源の活用
・スピーチ指導、面接指導を学校運営協議会委員に依頼して実施した。

(2) １年間の評価について

ア　ねらい

１年間の取組から来年度への改善方策を探る。

イ　実施学年・実施時期等

平成 31 年２月 21 日（木）～２月 28 日（木）に実施

ウ　取組概要

各項目への４段階の評価と記述による改善方策等の提案

エ　成果等

次年度へ向けた課題、改善方策が見えてきた。これらを参考にして、より充実した取組を計画し、実施する。

4　地域連携特例校・協力校の連携に係る成果（○）と課題（●）等

【成果と課題】

○国語、数学における連携協力体制は確立した。
○生徒会交流も、生徒たちの中で定着し、年々充実したものになっている。
●数学において、習熟度別学習につながるものを模索していく。
●遠隔システムを使用するよりも、対面授業の方に成果があるため、他の使用方法を研究する。

【今後に向けて】

・学校運営協議会の活用を、本校の教育活動中から具体的な取組へと深化させていく。
・本校の課題は「数学」「英語」などの少人数又は習熟度指導等を実施することにより、多様な生徒の困り感へ対応していかなければならない。

特例校	北海道興部高等学校	協力校	北海道紋別高等学校

1　大学出前講座及び特例校（雄武高校）間の遠隔授業の取組　【取組①及び③】

【取組の概要】

(1) 大学出前講座の取組

ア　実施学年・教科・科目等

第２学年／理科／化学基礎

イ　実施時期

平成 30 年 10 月 12 日（金）

ウ　実施内容

北海道大学低温科学研究所　三寺　文夫教授による出前講座を実施した。実験を通して浮力についての基礎知識を学ぶとともに、オホーツク海の熱塩循環について理解を深めた。

エ　実施に当たって工夫した点

・事前に協力校で行う実験装置と同じものを特例校に郵送し、特例校の生徒も協力校の生徒と同じ実験を体験することができた。
・講師が特例校の生徒の様子が把握できるよう、モニターの配置等を工夫した。

オ　成果等

遠隔システムを活用して、協力校で実施される大学出前講座を簡単に受講することができるとともに、特例校の生徒にとっても専門的な内容に触れるよい機会となった。

(2)　特例校（雄武高校）間の遠隔授業の取組

ア　実施学年・教科・科目等

第２学年／数学／数学Ⅱ

イ　実施時期

平成 30 年 11 月 14 日(水)、12 月 12 日(水)

ウ　実施内容

遠隔システムを活用し、他校の教員による少人数指導を実施した。

エ　実施に当たって工夫した点

・生徒の状況について事前に十分な情報交換を行い、授業がスムーズに展開できるように配慮した。
・生徒がポイントを理解しやすくするために、カメラのズーム機能等を活用した。

オ　成果等

・生徒は、他校の教員の授業を受けるということで適度な緊張感を持ち、集中力を欠かさず授業に取り組んだ。教員にとっても教科力の向上を図ることができた。

2　地域連携特例校・協力校の連携に係る成果（○）と課題（●）等

【成果と課題】

○出張授業や遠隔授業を活用することで、教育課程に幅を広げることができている。
○遠隔システムを活用するなどして、教員間の研修の充実を図ることができている。
●昨年度まで、協力校は遠隔授業を配信することを主な目的として、学校にシステムを設置、授業配信の教室等を準備し遠隔授業を配信していたが、今年度から協力校で受信し、研修会場として活用されることが増えたことで、遠隔システムの移動やスピーカー等の音声問題、ケーブルの長さなど会場設営等に課題がある。

【今後に向けて】

・平成 34 年度からの学習指導要領改訂を踏まえて、出張授業や遠隔授業等、今後の連携の在り方（教育課程の内容、教員加配の教科）について検討を行っていく。
・興部・雄武・紋別の３校間での連携の在り方について検討を行っていく。

特例校	北海道雄武高等学校	協力校	北海道紋別高等学校

1　大学出前講座及び学校見学会の取組　【取組①及び②】

【取組の概要】

(1) 大学出前講座の取組

ア　実施学年・教科・科目等

第２学年／理科／生物

イ　実施時期

平成 30 年 10 月 12 日（金）

ウ　実施内容

北海道大学低温科学研究所　三寺　文夫　教授による出前講座を遠隔システムを活用して実施した。実験を通して浮力についての基礎知識を学ぶとともに、オホーツク海の熱塩循環について理解を深めた。

エ　実施に当たって工夫した点

事前に協力校で行う実験装置と同じものを郵送してもらい、特例校の生徒は、協力校の生徒と同じ実験をすることができた。

オ　成果等

遠隔システムを活用して、協力校で実施される大学出前講座を簡単に受講することができるとともに、特例校の生徒にとっても専門的な内容に触れるよい機会となった。

(2) 遠隔システムを活用した教員研修の取組

ア　ねらい

遠隔システムを利用し、協力校との教員間の研修を深める。

イ　実施時期

平成 30 年７月 23 日（月）

ウ　実施内容

遠隔システムを活用して、協力校の教頭を講師として、公文書作成の研修を行った。

エ　実施に当たって工夫した点

声が拾える範囲にマイクを設置し、画面が全員見えるよう机を配置した。

オ　成果等

本校にとって遠隔システム導入後、初めての活用であったため、使用方法及び問題点等について理解を深めることができ、今後の遠隔授業への大きな成果となった。

2　地域連携特例校・協力校の連携に係る成果（○）と課題（●）等

【成果と課題】

○遠隔システムを活用するなどして、教員間の研修の充実を図ることができている。

●今年度から、特例校間で遠隔授業を配信することを行ったが、カメラの配置や教材の準備等、実践研修を早期に行うことが課題である。

【今後に向けて】

・平成 34 年度の学習指導要領改訂を踏まえて、出張授業や遠隔授業等、今後の連携の在り方（教育課程の内容、教員加配の教科）について検討を行う。

・興部・雄武・紋別の３校間での連携の在り方について検討を行う。

特例校	北海道阿寒高等学校	協力校	北海道釧路湖陵高等学校

1　協力校との連携による出張授業　【取組①】

【取組の概要】

(1) 実施学年・教科・科目等

・第３学年／国語／現代文Ｂ（２単位）
・第２学年／国語／古典Ａ　（２単位）
・第３学年／数学／数学Ｂ　（２単位）
・第１学年／保健体育／体育（スキー16 時間）
・第２学年／保健体育／体育（スキー16 時間）

(2) 実施時期

・国語及び数学は通年
・保健体育は平成31年１月16日（水）～２月６日（水）の期間で実施。

阿寒町ロイヤルバレーでのスキー授業の様子

(3) 実施内容

・現代文Ｂについては必修、古典Ａ及び数学Ｂについては選択科目として実施した。
・体育（スキー）については、阿寒町ロイヤルバレースキー場にて１日４時間４日間（計 16 時間）の授業を行った。

(4) 実施に当たって工夫した点

円滑な授業が展開できるよう、協力校の担当者との授業の打合せや時間割の調整を綿密に行った。

(5) 成果等

・特例校の教科担任が１教科１名配置のため、出張授業における協力校教諭との交流を通して、特例校の教諭の授業力向上が図られた。
・出張授業において、進学希望者向けの授業を実施することにより、生徒のニーズに応じた授業を展開することができた。
・出張授業により、スキー授業での生徒の技能に応じたグループ編成が実現し、生徒個々の技能の向上につなげることができた。

2　協力校との連携による学校行事への参加　【取組②】

【取組の概要】

(1) 統一学校説明会への参加について

ア　ねらい

協力校主催の統一学校説明会への参加を通して、地理的な条件によりオープンキャンパス等への参加が難しい特例校の進学希望者が、大学等への進学に関する情報に触れ、進路選択について考える機会とする。

イ　実施学年・実施時期等

平成 30 年８月 24 日（金）、協力校を会場として実施し、特例校からは、第１～３学年の希望者計９名が参加した。

協力校主催「統一学校説明会」参加の様子

ウ　取組概要

第３学年を対象とした進学相談会及び進路講演会、第１・２学年を対象とした進学相談会及び進路講演会に、協力校の生徒とともに参加した。

エ　成果等

夏季休業明けに実施することにより、生徒の意識を切り替えるきっかけになり、学校生活にメリハリを付けることにもつながった。また、協力校の生徒とともに参加することで協力校の生徒から刺激を受け、受験や学習に対する意識やモチベーションを高めることができた。

3　地域連携特例校間交流による遠隔授業　【取組③】

【取組の概要】

(1) 穂別高等学校との遠隔授業について

ア　ねらい

遠隔システムを活用した合同授業の実施を通して、両校の行事や特色ある取組について相互に発表を行い、成果や課題について意見交換する中で、自校の活動の良さや課題を再認識する。

穂別高等学校との遠隔授業の様子

イ　実施学年・実施時期等

第１・２学年の「総合的な学習の時間」において、平成30年11月21日（水）から平成31年１月25日（金）までの期間で１回２時間の授業を４回（計８時間）実施した。

ウ　取組概要

・８月31日(金)　両校教員の打合せ（遠隔システムを活用した打合せ）
①11月21日(水)　阿寒高校第１学年配信（阿寒幼稚園との交流）
②12月７日(金)　穂別高校第１学年配信（町内バス見学、小中高体験型ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ）
③12月18日(火)　阿寒高校第２学年配信（台湾への見学旅行）
④１月25日(金)　穂別高校第２学年配信（見学旅行）

エ　成果等

穂別高等学校との交流を通して、自校の行事や活動の良さを再発見するとともに、課題の検証と改善策について話し合うことができた。

4　地域との連携について　【取組⑤】

【取組の概要】

(1) 阿寒町四校連携委員会の取組について

ア　ねらい

平成20年10月に阿寒町四校連携委員会が発足。現在は、釧路市阿寒地区の幼稚園、小学校、中学校、高等学校の４校が連携し、学校教育目標の実現を目指した取組を通して各校に大きな成果を得る活動の創造・充実・発展を図る。

阿寒町連携委員会組織図

イ　実施学年・実施時期等

阿寒町の園児、児童生徒を対象として、６月及び９月に実施。また、時期や内容によって２校又は３校での交流も行っている。

ウ　取組概要

４校合同の取組として、６月にレクリエーション、９月に交通安全啓発活動を実施している。また、通年で幼稚園と高等学校との交流や４校の教職員が互いに授業を参観する公開授業を行っている。

阿寒町四校合同交流会の様子

エ　成果等

・園児や小・中学校の児童生徒と接する中で、高校生としての自覚を強くし、自ら手本を示し、リーダーシップを発揮する姿が見られるなど、生徒の成長がうかがえた。
・参加した第３学年男子生徒は「３歳から 18 歳と幅広い年代が集まる行事に最上級生として、下級生の手本となるよう取り組みました。普段の学校生活ではできない経験をすることができました。」と話していた。

5　地域連携特例校・協力校の連携に係る成果（○）と課題（●）等

【成果と課題】

○出張授業については協力校の担当教諭との連携により、学び直しなどの生徒一人一人に応じた指導が充実し、学習内容の定着が図られ、生徒の学習意欲も高まった。また、進学希望者向けの授業の実施により生徒のニーズに応じた授業を展開することができた。

○協力校との連携による統一学校説明会への参加が、進学希望者の意識の高揚を図る良い機会となった。今後も継続して実施したいと考えている。

●授業や行事、生徒会活動などにおける、遠隔システムを活用した効果的な連携の取組を進める必要がある。

●環境学習の一環として、協力校教員との連携により実施していた雌阿寒岳全校登山は天候や噴火警戒レベルの引き上げ等の影響により、今年度は中止となった。

●地域連携校間交流については、両校の行事や活動を発表した上で交流するため、後期に入ってからの実施となる現状であるが、内容等を工夫し、通年で実施することができるようにしたいと考えている。また、交流のための準備時間を授業時間で確保することが困難な現状である。

【今後に向けて】

・遠隔システムを効果的に活用した授業や行事の実施に向けて、早期から両校間で年間計画の調整を計画的に行う。

・雌阿寒岳全校登山については天候や噴火等の影響により実施できない場合があるため、代替となる環境学習の取組を次年度に向けて検討する。

・統一学校説明会への参加については、生徒の進路意識の高揚に成果を上げている。来年度以降も継続するとともに、協力校が実施する各種模擬試験や検定への特例校生徒の参加を検討する。